（別紙２）

審査の結果の要旨

論文提出者氏名　渋谷友紀

渋谷論文は、日本の古典芸能の１つである人形浄瑠璃文楽の人形遣いのスキル（わざ）について、生理的な呼吸と演技の関係から実証的に明らかにすることを目的としている。論文は７つの章から構成され、その中に２つの実験が含まれている。

第１章では、本論文において着目する呼吸と、ヒトの運動の関係に関する文献を概観している。その中で、スポーツや武道など多くの身体運動では、特定の運動と呼吸相が同期することが報告されており、スキル水準が高くなると協調の度合いが高くなることが示されている。一方、狂言師や歌舞伎俳優など日本の古典芸能の熟達者を対象とした研究では、その身体運動と呼吸運動の位相は必ずしも同期しないことが指摘されている。

第２章では、日本の古典芸能における「息」の概念について、文楽の人形遣いや三味線弾きの証言のみならず、能楽師や歌舞伎俳優の証言、あるいは世阿弥や近松門左衛門の記述にもとづいて検討し、1)「息」は、「形」と「形」のあいだをつなぐ時間的な間隙である「間」についての身体的な感覚を表現する語として用いられることがあること、2) 「息」は、実際の生理的呼吸として、同じ舞台に立つ他者の演技との関係を作る働きをもつことを指摘している。

第３章では、文楽の特徴である以下の３点を踏まえた研究仮説を提示している。すなわち文楽は、1) 役者自身が演じるのではなく、人形が芝居をする、2) 1 体の人形を３人（主遣い 、左遣い、足遣い）で操作する、3) 太夫と三味線弾きが音響的演技を行う三業の形態をとる、という特徴を有する。これらの特徴から、以下２つの仮説が提示されている。 1)「舞台歴の長い人形遣い（主遣い）が基礎的な演技動作を演じる場合、その呼吸は、演技動作とは非同期的な、比較的一定の呼吸になる。 2）「人形遣い（主遣い）の呼吸は床の要素（太夫の語りおよび三味線の音要素）に合う」。

第４章では、仮説１を検証した実験の結果が提示されている。実験では、舞台歴 31 年と 13 年の 2 人の演者が「主遣い」 として文楽人形を操作し、以下に示す３つの課題を実施する際の呼吸を、サーミスタ装置を用いて計測した。実施課題は、浄瑠璃がない条件における演技、および浄瑠璃に合わせた演技であった。動作と呼吸曲線の同期性および呼吸の周期性に着目して分析を行った結果、舞台歴の長い演者は、短い演者に比べ呼吸が動作に対して非同期的になると同時に、周期性が高くなる傾向が認められた。また、浄瑠璃に合わせた演技

を行う際には、浄瑠璃に合わせない演技をする際よりも呼吸の周期性が低下することが明らかになった。これらのことから、浄瑠璃に合わせない演技においては仮説１が支持された。一方で、浄瑠璃に合わせた演技における周期性の低下に関しては、呼吸が浄瑠璃要素に同期することによって生じる可能性が示唆された。

第５章ではさらに、仮説２の実験的検証を行った。実験では、舞台歴 31 年と 13 年の 2 人の演者が 演目『艶容女舞衣』の 主人公「お園」を「主遣い」として演じ、人形遣いの呼吸と太夫の語りとの関係について検討した。その結果、舞台歴の長い演者では呼気開始を太夫の語り始めに合わせているのに対し、舞台歴の短い演者では太夫の語り始めに呼気開始が遅れる傾向が認められた。これらのことから、舞台歴の長い演者においては呼吸が床の要素に合うという仮説２が支持された。

第６章では、総合考察として、人形浄瑠璃における呼吸は、日本の古典芸能で求められてきたように役者本人と役柄が完全に一体化してしまうのではなく、役者が役とのあいだに一定の心理的ないし認知的な距離を置きつつ浄瑠璃との協調関係を保持するという、きわめて高度なスキルの現れとして捉えられる可能性を提示した。

第７章の結論ではさらに、人形浄瑠璃文楽の人形遣いにおける「呼吸」が演者自身の身体という境界を超えて広がる周囲の環境との間の協調構造の中で明確な役割を果たしていることを確認し、日本古典芸能における「わざ」が、行為の詳細な観察によって実証的に記述しうることを示している。

本論文について審査委員からは、舞台歴の解釈や先行研究の位置づけなどに関して、論文の完成度を高めるための指摘がなされたが、日本の古典芸能に関する文献を丁寧に検討したうえで文楽における呼吸の位置づけを明らかにすることによって、時に神秘性をもって語られてきた文楽の技芸の一端を明らかにしたことが高く評価され、本審査委員会は全員一致で本論文を博士（学際情報学）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。